

太平記における畑時能

—最後の伝奇的人物—

加 美 宏

はじめに

畑六郎左衛門時能。篠塚伊賀守。この二人は、栗生・由良と共に「新田ノ四天王」（「太平記」天正本異本）と呼称されているように、新田義貞・義助兄弟に従って無双の勇士として聞えた存在であるが、「太平記」以外の、当時の記録類には、ほとんどあらわれず、いわば文芸と伝承の世界に生きている人物たちといえる。

「太平記」に描かれている彼らは、「日本一之大力ノ剛ノ者」といわれる超人的な武勇の持ち主というだけではなく、どこか尋常でない神変不可思議なはたらきをみせるのが特徴的であり、そういった意味で、スケールこそ小さいかもしれないが、大塔宮や楠木正成や児島高徳などの系譜につらなる伝奇的人物であるといえよう。

「太平記」巻二十三・二十四における畑・篠塚の敗死・没落を描いた二章は、南朝方の中心勢力であった新田氏の、北陸および四国における全滅を示しているが、同時にそれは、「太平記」における伝奇的人物の終焉を告げるものではなからうか。それはまた、伝奇的人物たちによって、ようやく支えられていた南朝の没落とも重なっている。

「太平記」は、このあたりを境にして、伝奇的人物にかわる、いわば現実的人物たちの相剋する新たな世界に入るのであって、群小人物ともいうべき畑・篠塚らの没落は、意外に「太平記」世界の大きな転回点を示しているように思われる。そこで小稿では、とくに伝奇的性格の強い畑時能に焦点をしぼりながら、その人間像や合戦譚の特質、或いは「太平記」における伝奇的人物の意味といったものについて検討を加えてみたいと思う。

まず畑時能は、どのような活躍をみせた人物であるか、その事蹟を年譜風に概観しておきたい。

畑時能年譜

年 月	事 項	資 料
① 一三三三・五	義貞に従い、鎌倉攻めに参加	太平記 卷10
② 一三三六・一	義貞に従い、三井寺攻めに参加 先陣で奮戦	卷15
③ 〃 4	義助に属し、舟坂山攻め搦手軍 に参加	卷16
④ 一三三七	義貞に従い、越前府中城攻めに 参加	卷19
⑤ 一三三八・閏7	義貞敗死後、義助の命により三 国湊城に拠る	卷20
⑥ 〃	二十三騎にて北陸の足利勢と対 峙、湊城を堅守	卷21
⑦ 一三三九・7	義助の隙により湊城を出で敵城 を多く攻略	〃
⑧ 〃	黒丸城攻略戦に参加、その謀略 により落城せしむ	〃
⑨ 一三四〇・10	斯波高経軍、越前畑城を攻略、 時能、斯波軍に降る	得江文書

⑩ 一三四一・7	足利方吉見頼隆軍、越前高樫城 (鷹巣城)を攻む	〃
⑪ 一三四一	北陸の南朝方、時能ら二十七騎 の鷹巣城のみ残る	太平記 卷23
⑫	足利勢、鷹巣城を包囲、時能、 飼犬の先導による奇襲で次々と 敵城を落し、大いに足利勢を悩 ます	〃
⑬ 〃 10	十六騎を率いて城を出で伊地智 山に斯波軍を破る	〃
⑭	矢傷により合戦の三日後に吠え 死す	〃

畑時能が、はじめて「太平記」に登場するのは、右の年譜の⑩にかかげたように、討幕軍を率いた義貞が、例の稲村ヶ崎を干潟として鎌倉に乱入した折のことである（卷十「鎌倉中合戦事」。この時、嶋津四郎なる武士が、北条方の期待を一身に荷って、威風堂々と進み出でてくる。続いて、

「源氏ノ兵是ヲ見テ、吉敵也ト思ケレハ、栗生、篠塚、畑以下之若者共、我前ニ組ト馬ヲ進メテ近キケリ、両方名誉ノ大力共カ、人交モセス勝負ヲ決セムトスルヲ見テ、敵御方ノ軍兵片啣ヲ呑テ是ヲミル処ニ……」

とあって、畑は、義貞麾下の「はやり男」で、「名誉ノ大力」の一

人として名をあげられているわけである。もっともこの勝負は、嶋津が焨らに近づくやいなや、いきなり冑をぬいで降参を申し出るという、まことに期待はずれの喜劇的な幕ぎれとなり、焨らは、せつかくの武勇を披露することなく終るのであるが……。

右の本文引用は西源院本に拠¹⁾ったが、「太平記」のいわゆる古態本系統諸本の本文は、いずれも右の文とほぼ一致している。しかし後出諸本では、例えば「栗生・篠塚・焨・矢部・堀口・由良・長浜ヲ始トシテ、大力ノ覚ヘ取タル悪者共、我先ニ彼武者ト組テ勝負ヲ決セント……」(慶長八年古活字本「古典大系本」とか、「新田ノ四天王ト云レケル栗生・篠塚・由良新左衛門・焨六郎左衛門以下ノ若物共……」(天正本の異本)というような増補が行われており、合戦記の成長過程がうかがわれて興味深い。

二

さて、焨時能が、その「名答の大力」ぶりを、はじめて發揮するのは、さきの年譜の②にあげた三井寺合戦の場においてである(「太平記」巻十五「三井寺合戦事」)。

建武新政挫折の原因ともなった公式の対立は、建武二年(一一三三)末頃から、新田・足利の争いという形をとってくるが、箱根・

竹ノ下の決戦に敗れて西走した義貞軍を迫って、足利軍は翌延元元年正月に入京して京を制圧した。ために叡山にのがれていた後醍醐天皇方は、北皇顕家が奥州勢を率いて西上したのに力を得て、義貞・顕家の軍が、正月十六日、まず園城寺(三井寺)に拠った足利軍を攻めて、これを破った戦いが、「三井寺合戦」である。

この三井寺合戦は、後醍醐方が連戦連勝して尊氏を西走させるきっかけをなすものであるから、延元の乱の中でも重要な意味をもつ戦いといえるが、その勝利の立役者が、焨・篠塚たちであったと「太平記」は描くのである。

この日はやくから後醍醐方は三井寺に総攻撃をかけるが、細川定禅らの指揮する六万余騎の足利勢も堅く守って容易に落ちない。みかねた脇屋義助が、

「云甲斐ナキ物共ノ作法哉、緞ノ木戸一ニ支ラレテ、是程ノ城一ヲ責落サスト云事ヤアル、栗生篠塚ハナキカ、アノ木戸取テ引破レ、焨亘理ハ無カ、切テ入レ」

と下知する。これに応じて、まず栗生・篠塚が五六丈もある大卒都婆二本を、えいよつとばかり引きぬいて堀を渡る橋に替えると、焨・亘理がさらさらと渡って木戸にとりつき、「二本渡セル八九寸ノ関ノ木」を焨が踏み破って、三万余騎の新田勢を城中に入れ、勝利を収めたとしている。

ここでは、新田勢の武勇の荷い手であった四人の勇士の、いわばチームプレーとしての功名譚が語られているが、木戸の扉を踏み破るといふような超人的な働きぶりの記述に、伝奇的人物としての畑の片鱗が示されているといえよう。

さて、尊氏は九州に走ったが、山陽道の武士たちの多くは足利方につき、尊氏追撃の新田軍も苦戦をしいられる。赤松の白旗城を攻めあぐんだ新田勢は、ほこ先を転じて山陽道の要衝であった舟坂山（播磨と備前の境にある船坂峠）の敵軍を攻めるが、その折の搦手軍の中に畑の名が認められる（前記年譜の④、「太平記」巻十六「西国蜂起新田義貞進発船坂熊山等合戦事」）。

難攻不落と思われた、この「山陽第一ノ難所」を、うしろの「鹿ノ渡ル道」から潜行、奇襲して落とした搦手軍は、「態ト小勢ヲ勝^ト」った三百余騎の精銳であり、主としてこの辺の案内に通じた山陽勢で組成されていたが、その中に選抜されて新田方から畑と由良が参加しているのである。このあたりにも、後日、神出鬼没の奇襲戦を展開する畑時能像への伏線がみられよう。

三

東上してきた尊氏に追われて義貞が北陸に落ちた後も、畑は義貞

を助けて、例えば、加賀國の住人敷地伊豆守らと語らって味方につけ、越前府城攻めに参加させたりする働きをみせているが（前記年譜④、「太平記」巻十九「義貞被攻落越前府城事」）、彼の活躍が目立ってくるのは、暦応元年（一一三三）閏七月、義貞が藤島に敗死して後のことである。

義貞の死後、畑は義助の命によって越前三國湊の湊城に籠ったが、「保二町ニタラヌ平城」で、しかもわずか二十三人という手勢でもって「加賀、能登、越中、越前四ヶ國之勢共力資カネテ引シ城」だったと「太平記」は記している（巻二十一「義助資落黒丸城事」）。

約一年の間、湊城を孤軍よく堅守した後、暦応二年（一一三三）七月、畑は義助の隙により城を出て、斯波高経の拠る黒丸城攻略戦に参加するが、その途次でも十二か所の城を打落し、「首ヲ切事八百余人、女童部三歳嬰兒マテモ不殘皆指殺」したという。ここらあたりが後に悪逆無道の人であったと「太平記」作者の批判を諷むる所以であろうか。

黒丸城攻略戦の物語も畑の功名譚といってよい。黒丸城を包圍した新田軍の中から、畑が出て終夜城をめくり、デモンストレーションをかけると、この「命ヲ此城ニ向テ止メント思定テ」いるらしい「日本一之大力ノ剛ノ者」との戦いをおそれた斯波は、一戦もまじ

えずに城に火をかけ、加賀に退去するのである。

義貞の後を継いだ義助のこのような北陸経営も、翌暦応三年（一三四〇）になると、斯波高経軍の反攻に逢って次々と拠点を破られ、時能の「畑城」も攻略されることになるのである。「得江文書」〔能登〕の中の「得江九郎頼貞申越前軍忠事」と題する軍忠状に、

「一同、十月十九日、押寄畑城致合戦、同廿一日打破一二木戸、焼払置城、至千同廿六日、頼貞致軍忠之処、翌日、畑六郎左衛門尉、参御方之間、破却城堀訖、

という記事がみられる（前記年譜⑩）。

この記事は、畑時能が、文芸的作物たる「太平記」以外の、当時の確たる史料にあらわれた唯一の事例とみなされる。この記事にあるように、畑が斯波の軍門に降ったとすれば、「日本一之大力ノ剛者」にとつては、一代の恥辱事であつたはずである。「吾朝（ニ）措テハ未畑カ勇力智謀ニ並フヘキ人ハ無」つたとまで称嘆している「太平記」が、この降参をどのように扱っているか、すこぶる興味をひかれるところであるが、ちょうどこの期間の新田・足利の北陸合戦記は、欠巻となっている巻二十二（古題本）において扱っていたであろうと推測される記事にあつていて、残念ながら、うかがうすべもないのである。

それにしても、一たんは斯波に降つたはずの時能が、欠巻のすぐ後に続く「太平記」巻二十三冒頭にみるように、翌暦応四年（一三四一）、再び忽然と北陸唯一の官方として登場し、大いに足利方を極ますというようなことが、どうして可能であつたのか、これは一つの謎としなければならぬ。或いは、あの降参も、彼の「智謀」にもとずく破術的なものであつたのか、この端倪を許さない不可思議な出沒が、時能を伝奇的人物たらしめていたといえよう。

四

さて、「太平記」巻二十三の冒頭にいたつて、畑時能は、ついに「畑六郎左衛門時能事付戎王事并鷹巣城合戦事」の一章を与えられて、これまでみてきたような武勇譚を、いわば集大成し、伝奇的人物としての人間像を完成させることとなるのである（前記年譜⑪）。

そこにはまず、「去年之九月、杣山城ノ落シ後ハ、越前、加賀、能登、越中、若狭五ヶ國之間ニ、官方之城一所モ無ケルニ、畑六郎左衛門時能僅ニ廿七人ニテ籠タル鷹巣城一所ソ猶殘リタリケル」と、興國二年（一三四一）頃の北陸における時能の全き孤立的状況が描き出されている。

そして、袖山城を脱した一井氏政の時能軍への合流を記した後、「時能カ勇力、氏政カ氣分、小勢也トテ關ナハ、何様之大事カ出来リナントテ、足利尾張守高経、高上野介、北陸道七ヶ国之勢七千余騎ヲ率シ、鷹巣城之近辺千重百重ニ取巻テ、卅余ヶ所之向城ヲ取テ、遠攻ニコソシタリケレ」とする。

次いで、時能の生い立ち、人となりを記している。武蔵の住人で、十六の時、相撲をとっては坂東に並ぶ者なく、のち信濃に移住して、もっぱら狩を業とし、馬・弓・水練にも、「神変ヲ得タルガ如」くであり、智謀・剛氣をもって、合戦にも抜群の強さを發揮したという。さらに、「物ハ類ヲ以テ集ル習」とて、甥の所之大夫快舜という悪僧、中間の悪八郎というみ、つ、く、ちの大力、犬獅子という名の不思議な忠犬が、彼に従って手足のように活躍することとなる。

すなわち、この鷹巣城の主従三人と一匹のチームは、暗夜となれば、敵の向い城に忍び入り、まず犬獅子に様子をうかがわせるに、用心きびしき時は、一声二声吠えて走り出し、用心緩やかな時は、尾をふって主に合図をおくったので、これを案内者に城中に討ち入り、「叫キ喚ヒ、縦横無碍ニ」切ってまわり、ために「数千之敵軍俘キ驅テ城ヲ落サレヌハ無リケル」というありさまであった。

かくて夜毎に二つ三つと城を落された包围軍は、「御方ニ笑ハレ

ム事ヲ恥テ、ひそかに時能に、兵糧・酒肴を送って夜討を免れようと競うまでにたちいたる。こうした中で、時能との内通を疑われた上木家光なる武将が、名替挽回と、一気に鷹巣城に攻めこもうとしたのを好機に、寄手は総攻撃をかけるが、城方は、例の大力の悪八郎が、五六十人でも動かないような「大磐石」を落しかけるなど、時能ら五人の兵の活躍で、七千の大軍を撃退する。

これ以後、寄手は、ますます時能を恐れて遠巻きにし、持久戦法に出たために、かえて例の夜襲戦法もとりにくくなり、ついに城から打って出ざるを得なくなる。暦応四年十月二十一日、時能は、わずか十六人を率い、城を出て伊地智山に出陣、三千余騎の高経軍と激戦を展開、ついにこれを破ったけれども、頼みの快舜は討死、自身も肩先きに射こめられた白羽の矢が、どうしても抜けず、三日間苦しめいた末、「吠死」という壮絶な最期をとげることになって、この北陸における官方・新田軍最後の合戦譚は終幕するのである。

五

さて、この時能の最期譚、鷹巣城合戦記の特徴といったものについて考えてみたいが、何といっても、その庄巻をなすものは、犬獅

子の先導による時能らの敵城夜襲をくだりであろう。大敵を手玉にとった連夜の奇襲攻撃も、この「不思議ノ犬」の人も及ばぬ働きにはあり得なかつたし、それがこの合戦譚に、ひとときわ伝奇的な色彩を賦与してもいるのである。

大が合戦に活躍する話は、ありそうで実は意外に珍しいのではなからうか。「南総里見八犬伝」のような近世の伝奇小説などは別として、中世・近世のおびただしい軍記類の中で、管見に入ったものとしては、「奥羽永慶軍記」の例があるくらいなものである。同書巻十九に、武州岩槻城主太田五郎なる武将が、岩槻・松山両城に各百足ほどの犬を飼い、岩槻で飼った犬を松山に、松山のを岩槻にそれぞれおいて、敵に包囲されて飛脚等のかなわぬ時に、犬の首に書札をつけて両城を結ぶ伝令とし、勝利を得たことがみえている。

この犬獅子の話の後に、「太平記」は、むかし周の王に飼われていた犬が、王の戯れの言をうけて、周の宿敵我國の王を食い殺し、その食に後の一人と我國とを与えられて犬我國をおこしたという中国故事を引いているが、このような現実ばなれした故事説話が、アナロジー（類比）として、必ずしも不相応と感ぜさせないようなところが、この犬獅子とその主時能の物語にはあるのだ。

文化三年（一八〇六）に竹内寿庵が著した「越前名勝志」は時能終焉の地とされる大野郡伊知地の西、鷲が嶽麓の黒龍川に、獅子岩

なる岩があり、これは川中で殺された犬獅子が化したるものとする「土人」の伝える載せている。これなどは犬獅子譚の不思議さ、印象深さが、別の伝承を生み出した例であろうが、或いは、「太平記」とは別箇に、時能活躍の当時から、在地「土人」の間で驚嘆と畏怖の念をこめて語り伝えられてきた「烟語り」というべきもの一つであったかもしれない。

ところで、このような「不思議ノ犬」を自在に駆使した時能の珍しい奇襲戦法は、著しくゲリラ的であり、また時能ら三人組が、「或ハ大鎧ニ七ツ物持時モアリ、或ハ帽子冑ニ鎧リヲ着テ、足軽ニ出立時モアリ」とあるように、時に応じて出で立ちを変えながら敵城に忍び入っているところなどは、忍者的ともいえるであろう。

そして、これらのゲリラ的、忍者的戦法は、信濃において、「三物カエ之狩ヲノミ事トシテ、年久ク有」ったという時能の前身とかわりがありそうだ。彼がながらく狩猟を業としていたのであれば、山地の地形や夜の闇を利用した奇襲はお手のものであったろうし、また当然、すぐれた猟犬を駆使していたことが考えられるからである。⁽⁴⁾

これに関連して、俗書ではあるが、『太平記評判私要理尽無極抄』（文明八年―一四七六年の序があるが、実際の成立はかなり下るか）に興味深い記載がみえる。すなわち、時能は武蔵居住の時から白犬を飼っていたが、山賊の張本だった父の死後、父の業を継ぎ、信濃移住の後、常に強盗の偵察にこの犬を用いており、その習性が鷹巢城における敵城偵察に発揮されたのだというのである。

また『太平記』評判書の鼻祖で、近世初め頃、大いに流布した『太平記評判秘伝理尽抄』も、『伝ニ云ク』として、時能はもと強盗などとして、すでに処刑されるところを、義貞に助けられ、その恩義に感じて義貞のために奮闘したということや、畑には秘蔵の犬二疋があつて、夜中に城の窟に來る人あれば吠え怒り、猪をもくらった故に「狗獅子」と名付けられたということなどを載せている。

この「無極抄」や「理尽抄」は、ともに成立年代も確定できず、記事の信憑性についても疑問の多い書物である。右の時能に関する記事も、それが史実かどうかを問題にするよりも、近世初め頃に行なわれていた伝承としてうけとっておきたいが、ただ、右にあげたような一見無稽な伝承の中にも、案外と事実より発するものがよく

まれていることと、畑時能という人物自体に、こういう伝承を生み出す下地が備わっているということの二点を指摘しておきたいと思う。

畑時能に関するさまざまな伝承が伝えられているのは、彼の超人的で神出鬼没の活躍ぶりによると共に、その前半生に謎が多いということもかかわっているようだ。そもそも時能はどんな素姓の人物なのか、とくに一章を立てて、その事蹟や最期を克明に物語っている『太平記』が、その素姓については、「元者武蔵国住人ニテ有シカ」と記すのみである。例えば、時能らと共に新田四天王と呼ばれた篠塚伊賀守には、「畠山庄司次郎重忠ニ六代之孫、武蔵国ニヲヒソタチテ、新田左中將殿ニ一騎当千ト恐レタリシ篠塚伊賀守ト云者愛ニアリ」（卷二十四「篠塚落事」）と名乗らせて、その出自を明らかにしているが、時能の系譜・出自については全くふれるところがない。『太平記』以外の系譜類などにも時能の名は見当らず、渡辺・八代共著の『武蔵武士』は、時能を畠山重忠の末孫としているが、その拠るところを明らかにしていない。

時能の素姓について、前記「無極抄」が、「民間庸夫ノ子ナレドモ、相撲ニ名ヲ得テ畑ヲ以テ氏トス」としているのが、意外に真実を伝えているかもしれない。要するに時能は由緒正しい武士の出ではなく、その出身の疑わしい人物であるといつてよからう。そういう

った出身・前身の謎が、前記の、もと「山賊」「強盗」説という伝承を生み出したといえようが、山中において神出鬼没の活躍をみせる山賊・強盗と、「太平記」に描かれた時能のゲリラ的、忍者的な活躍ぶりとが、あざやかな符合をみせているところに、この伝承のおもしろさがある。

七

「太平記」の前半部分には、「野伏・足輕」や「山立・強盗・盜者」といった連中が頻りに登場し、不敵で奇抜なゲリラ戦を展開しているが、「太平記」における時能の戦いぶりは、これらの「悪党」とちと極めて似かよったものであり、そういう意味でも、時能の「山賊・強盗」前身説が出現するのは当然のように思われる。その戦いぶりはまた、「悪党の長者的存在」と林屋辰三郎氏が呼ばれる楠木正成の戦法と共通したものであることはいままでもあるまい。つまり時能の戦法は、きわめて「悪党的」といえることである。では、「太平記」巻二十三に描かれている時能を、巻十あたりまでに活躍する楠木正成や、「山立・強盗・盜者」といった「悪党」と同じものとみなせるであろうか。

鎌倉末期頃から南北朝期にかけて、各地でしきりに出没した「悪

党」については、それがすこぶる多様な側面を持つために、その評価は必ずしも一定しないけれども、概していえば、単なる富の掠奪者・荘官職などの争奪者にすぎないとする否定的な評価よりも、そういう類魔的側面を認めながら、その反鎌倉幕府的・反荘園体制的な方向性やエネルギーを積極的に評価し、この期の社会変革に一定の役割を果たしたとする見方が支配的であるように思われる。

建武新政成立以前の楠木正成は、まさしくそういう意味での「悪党」の典型であろうし、同じ時期の「野伏・足輕」「山立・強盗・盜者」たちの反体制的・反逆的な行動にも、同質の「悪党」性が認められよう。例えば、

「千劍破ノ城ノ奇手ハ、前ノ勢百八十万騎ニ、赤坂ノ勢、吉野ノ勢馳加テ、二百万騎ニ余リケレハ、城ノ四方二三里方間ハ、見物相換場ノ如ク打囲ミテ、尺地ヲモ余マサス充滿シタリ、(中略)此勢ニモヲソレス、纒ニ千人ニタラヌ小勢ニテ、誰ヲ恐ミ、何ヲ待トシモ無、城中ニコラヘテ防キ戦ヒケル、楠力心ノ程コソ不思議ナレ」(巻七「千劍破城軍事」)

というような、いかなる大敵をも、ものともせぬ「不思議ナ」までの不敵さ、したたかきや、或いは、都落ちする光厳天皇の一行をとりにかこんだ野伏たちに対し、護衛の武士が天皇の權威をふりかざして狼籍者呼ばわりすると、

「野伏共カラ〜ト打笑テ、イカナル一天ノ君ニテモ渡セ給ヘ、御運尽テ落サセ給ハンスルヲ通シ奉セシトハ申マシ、概ク通りタク被思召ニハ、御共仕リタリ武士共ノ、馬物具ヲ皆捨サセテ、心安ク落サセ給ヘト申モハテス、同音ニ時ヲトット作ル」(巻九「五月七日合戦事同六波羅落事」)

というような、幕府のみならず天皇まで「カラカラト」笑いとばすほどの、徹底した古代的偶像・權威の否定ぶりなどが、いわば「悪党」の本領というべきものであり、そういう悪党的なものを文学として形象しようとしたところに「太平記」の最も大きなモチーフを認められた黒田俊雄氏の指摘は、今なお新鮮であるように思われる。

八

「悪党」の本質を右のように把握する観点に立てば、時能の場合には、その戦いぶりこそ「悪党」的であるが、「悪党」の本領たる反体制・反權威的なものは認めることができず、「悪党」とは似て非なるものといわねばなるまい。これは、時能ばかりでなく、北陸における新田氏全体についていえることであるが、歴史を前におしすすめる方向にむしる逆行し、ために展望のない戦い展開せざるを得

なかつたところに、「太平記」第一部における「悪党」正成らとの決定的なちがいが認められる。

そのことは三國湊城や鷹巣城における時能の孤立状況によくあらわれている。彼は北陸におけるただ一人の後醍醐方・新田方として孤立していたばかりでなく、在地の武士や民衆からも孤立していたのである。時能の奇襲戦の協力者が、彼の甥と中間と愛犬だけであつたというのは、そういう時能の立場を象徴的に示している。さきにもふれたように、時能は、黒丸城攻略戦の途次、十二の城を落し、八百余人の首を切り、さらに「女童部三歳嬰兒」に至るまで残らず指し殺している。これでは在地民衆の支援など望むべくもなく、むしろ残忍な敵対者とみなされたであろう。

在地民衆の協力・援助なくしては、長期の籠城戦やゲリラ戦を展開できないことはいうまでもあるまい。「太平記」第一部における正成が、例えば、

「和田・楠、和泉・河内ノ野伏共ヲ五六百人駆集テ、可然兵ヲ二三百騎差副テ、天王寺ノアタリニ遠カ、リヲタカセケル」(巻六「楠出天王寺事并六波羅勢被討事同宇都宮寄天王寺事」)

というように、武装した民衆というべき「野伏共」とも密接につながり、一体となって戦うことができたのと対照的である。こちらあたりに、「太平記」が、時能の勇力智謀を称嘆し、その戦いぶりを

克明に描きながら、いまひとつ彼を英雄化できずに終っている一因があるではなからうか。「太平記」作者は、時能の凄絶な死を記した後に、その生涯を総括しながら次のような批評を加えているのである。

「異朝之事ハ未タ例スルニ不違、吾朝(一)措テハ未タ烟カ勇力智謀ニ並フヘキ人ハ無リツレ共、其平生之振舞ヲ聞ニ、僧法師ヲ殺シ、仏闍社壇ヲ撰テ、善ヲ修スル心露計リモ無、悪ヲ致ス業ヲ山之如クニ重ナリシカハ、遂ニ天之為ニ罰セラレテ、流箭之疵ニ死ニケリ(後略)。(卷二十三)「烟六郎左衛門時能事付我王事并應果城合戦事)」

建武新政が崩壊し、新しい武家政権へと進行する歴史の大きな流れにさからいながら、在地民衆からも孤立して展望のない戦いを続ける時能は、もはやかつての正成のような英雄的存在ではあり得ないし、むしろある意味では喜劇的存在とさえいえるかもしれない。いや、その正成にしてからが、建武新政崩壊後は、ほとんど時能と同じ悲劇的(或いは喜劇的)存在となつて、むなしく湊川に横死しているのである(卷十六)「尊氏義貞兵庫湊河合戦本馬重氏射鳥事并正成討死事)」。

こういった事情は、時能より後まで生きのびて伊予に渡つた新田四天王の一人篠塚伊賀守の場合も同様である。彼は伊予における新

田軍の全滅後、ひとり瀬戸内海の「隠岐嶋」にのがれて跡をかくしているが、その島渡りの時、敵船に乗りこみ隠岐へ送れと命じた後、二十余人力のいる碇をやすやすと引きあげ、「十四五尋」ある碇を軽々とおし立て、いびきをかいて寝てしまったという(卷二十四)「篠塚落事)。「凡夫ニハアラジ」と水夫らを畏怖させた、この剛力豪胆ぶりは、新田四天王最後の武勇伝といえるが、反面、「太平記」の大きな流れの中において読みとれば、歴史の大波に没してゆく者の、引かれ者の小唄に近いものであることも認めないわけにはゆかないのである。

九

烟や篠塚の主であった新田義貞が、暦応元年(一三三八)、越前で敗死した時、「太平記」は、その死について次のような批判を加えている。

「此人君之股肱トシテ武將之位ニ備リシカハ、身ヲ慎ミ命ヲ全シテ、大儀ノ功ヲコソ致サルヘカリシニ、自ラサシモナキ戦場ニ起テ、匹夫之矢サキニ命ヲ留メシ事、運之弱トハ云ナカラ、ウタテカリケル振舞也」(卷二十一)「義貞朝臣自殺事)」

「太平記」作者は、建武新政崩壊から南北朝分裂に至る天下の争

乱を、新田・足利という両家の棟梁権争いとしてとらえ（巻十四「足利殿と新田殿確執事并両家奉状事」など）、新田氏の北陸落ち以後も、その動向に深い関心を寄せ、大きな紙幅をさいてきたのであるが、義貞がそういった期待をうらぎって、あまりにもふがいない最後をとげたことに對して、深い失望の氣持をかくしていないわけである。新田氏を後醍醐方の支柱として期待をかけたばかりでなく、その智謀武勇を、しばしば称揚してきた⁽¹⁰⁾『太平記』の作者が、この義貞の、全く英雄的でない「犬死」に満足できなかったことはいうまでもないことであつて、その代替的な役割を、畑や篠塚の不屈で不敵な抵抗ぶりに求めたのではなからうか。

しかし、義貞の死によつて、新田・足利の園争いという『太平記』作者の構図が完全に崩壊し、諸國の武士たちの動向を的確にとらえて新しい武家政権を樹立した足利氏の天下が確定した時点において、新田方の、ひとにぎりの殘党にすぎない畑や篠塚が、真に英雄的人物となり得る条件が存在しなかつたことに前述のとおりである。

新田氏に、いわば肩入れしてきた『太平記』作者の余熱のごときものによつて、畑や篠塚たちのほとんど目的と展望を持たない孤軍奮闘ぶりを、なお追跡し、称揚しようとするれば、おのずと、その超人的な「勇力智謀」や、「凡夫」と異なる不可思議な行動力といつ

た伝奇的側面を強調するほかはないのであつて、彼らが伝奇的人物として形象された必然性が、そこに存在するように思われる。

十

ところで、この畑や篠塚のような、常人と異なる不可思議な力を備え、奇策縦横の活躍をみせる伝奇的人物の系譜をたどつてゆくと、当然のことに『太平記』第一部における楠木正成にゆきつく。或いは、架空の人物説さえ行なわれた正体不明の児島高德なども、別の意味で伝奇的色彩の濃い人物といえよう。さらに摩利支天の秘法たる隠形の法を用いて危難をのがれたとされる大塔宮や（巻五「大塔宮入替大般若檀事」、靈夢によつて正成を見出したり（巻三「笠置臨幸事」、神仏の加護によつて隱岐脱出に成功したり（巻七「舟上臨幸事」）している後醍醐天皇その人もまた伝奇の中の人物といつてさしつかえあるまい。

『太平記』のいわゆる第一部において、これらの後醍醐天皇周辺の人々が、伝奇的色彩を持つ人物として描かれているのは、この人たちが、散所民・修験者・悪党というような、歴史の裏通りに出没する、いわば影の集団に支えられていたらしいことともかかわるものと思われるが、こうした下層民衆ともつながりながら、討幕から

建武新政へと歴史をおしすめる役割を荷った彼らは、伝奇的人物であると同時に、英雄的存在であり得たわけである。

これに対して、卷十二あたりから以後の、『太平記』第二部の世界は、右にみたような伝奇的人物を主体とした後醍醐方、南朝方と、伝奇的世界とは無縁の、いわば現実的人物たちの連合体といえる足利方・武家方とが、はげしく相剋し、前者が敗北してゆく過程としてとらえることができよう。第一部においては英雄的存在であつた後醍醐方の伝奇的人物たちも、この第二部においては、歴史の流れに逆行して、しだいに孤立してゆき、もはや英雄的存在ではあり得なくなっていることは、すでに指摘した。

卷二十一「先帝崩御事」の章において、後醍醐天皇が「玉骨者縦雖南山之菅ニ埋マルトモ、魂魄者常ニ北闕ノ天ヲ臨ント思フ」と、京都回復への妄執を遺勅して、その数奇な生涯を閉じたのは、右にみたような第二部の世界の終局を告げると同時に、天皇の周辺につきまといつてきた、一種の神秘的、伝奇的世界が終幕したことをも示している。

そうして、卷二十三～二十四における畑や篠塚の、伝奇的な活躍よりは、そうした後醍醐方にまつわる伝奇的世界の残映的存在といふべく、彼らの退場は、もはやそういった伝奇的人物たちの存在をゆるさない新しい時代が到来したことを示している。

『太平記』は、このあたりを境として、古代的な権威や呪縛から解放され、現世をぞんぶんに享樂し、現実的な利害得失を唯一の行動基準とするようなリアリストたちの時代に入るのである。彼らは、例えば、南朝方の拠つた聖域吉野山を平然と焼き払い（卷二十六「吉野炎上事」）、「ソ、ロナルハサラニ依テ、身ニハ五色ヲ粧キ、食ニハ八珍ヲ尽シ」（卷二十五「天龍寺事」）、「五度十度敵ニ属シ御方ニ成リ、心ヲ変セヌハ稀也」（卷二十九「仁義血氣勇者事」）といった生きざまを示すのである。

十一

このように卷二十三～二十四における畑や篠塚といった、群小人物の退場に、一つの象徴的意味を認めるのは、このあたりから、右にみたようなリアリストたちが、横行し、相剋する新しい世界（いわゆる第三部世界）に入るといふばかりでない。それ以後の『太平記』には、もはや伝奇的人物といふべき人間像をみる事ができなくなる一方、正成らかつての伝奇的人物たちが、怨靈となつてしきりに出現するようになるなど、『太平記』の新しい局面が、ちようど彼らの退場といれかわりにあらわれてくるからである。

南朝方を支えた伝奇的人物たちはどこへいったのか。例えば、父

正成の遺志を継いだ楠木正行は、正平の一時期、南朝の主柱として父に劣らぬはなばなしい奮闘ぶりをみせるけれども、この父子の人間像のちがいを一言でいえば、正行には、正成のような伝奇性が無いということであろう（巻二十六「四条合戦」など）。また第一部以来の伝奇的人物の生き残りといえる児島高德なども、すっかりかつての精彩を失い、新田氏とつながりながら、ほそぼそと生きながらえている形跡を残しているにすぎない（巻二十五「三宅荻野謀叛事」、巻三十一「八幡落事并宮御打死事向公家達被打給事并諸国後攻勢引返事」）。しかも、巻四に「今木三郎高德」（章段名には「和田備後三郎」とも）の名で登場し、例の桜樹題時説話を残した人物と、「三宅三郎高德」（巻二十六）「児嶋備前入道忠継」（巻三十一）とが、はたして同一人物であるかどうかさえも、必ずしもたしかではないのである。畑らの退場以後の「太平記」に登場する南朝方で、ただ一人、伝奇的人物となり得る資質を備えていたようにみえるのは、「其振舞恰天ヲ翔リ地ヲ潜ルカト怪キ程ノ勇者」とされ、「千変万化留テ人之態ニ非」ず、といった活躍ぶりをみせている新田義興（義貞の次男）であるが、彼もまた、その能力を十分に發揮しないうちに、むなしく矢口の渡に惜死してしまふ。彼ほどの勇者が、「短才慮愚之者共」にたばかられて耐れたのは「運命窮リテ」のことであると「太平記」はいうが、けだし「欲心熾盛」のリアリスト

全盛の時代に生れあわせた伝奇的人物の必然的運命というべく、かかる人物は、ただ怨霊と化して、リアリストたちに復讐するほかはないのである（巻三十三「新田左兵衛佐義興自害事并江戸遠江守事」）。

怨霊と化するのには義興ばかりではない。巻二十三「畑六郎左衛門時能事」のしばらく後に置かれている「上皇御願文事」の章あたりから、後醍醐天皇をはじめとして、正成（巻二十三「正成爲天狗乞劍事」）、大塔宮（巻二十六「大塔宮亡霊宿胎内事」）など南朝方の伝奇的人物たちが怨霊となって出現したという記事が目立つようになってくる。

この事実には、「太平記」作者の、南朝方の伝奇的人物たちに寄せられる思い入れの深さが、なみなみのものでなかったことを示しており、さらに鈴木登美恵氏が指摘されたように、この人々の怨霊によってひき起こされた果てしない乱世を記述したのが「太平記」第三部であるという、「太平記」の前半、後半の構想をつなぐ重要な役割を荷うものであるが、他方からいえば、現実の世界において、リアリストたちに完全に敗北し、畑らを最後に跡を絶たざるを得なかった伝奇的人物は、結局、怨霊の形をとって再びこの世に出現し、その妄念を遂げようとするしかなかったことを物語るっているわけである。伝奇的人物は、もはやそういう「神話的記述」のなかにしか

生きられなくなったといつてもよいだろう。

十二

このようにみえてくると、畑や篠塚は、義貞・義助麾下の「若党」の一人にすぎず、いわば群小人物の域を出ない存在であるけれども、「太平記」における伝奇的人物を重視する観点よりすれば、いわば最後の伝奇的人物として、作品中において意外に大きな比重を占めているようであり、卷二十三〜二十四における彼らの退場は、「太平記」の文学的世界を大きく区分する一つの指標とさえなるかもしれないと考える（旧来の区分に従えば、ほぼ第一部・第二部と第三部の世界を区分する位置にあるといえる）。

伝奇的世界と現実的世界の相剋・交替という、「太平記」全体の文学的構図を描くことが許されるとすれば、前者の殿軍的位置を、畑および篠塚の退場にみたいと思うのである。そうして、「太平記」の後に続いておびただしく著作される、いわゆる後期軍記の類に、こうした伝奇的人物を、ほとんど見出すことができないという事実も、「太平記」のいわゆる第三部と後期軍記の同質性⁽¹⁾という問題とから見て注目される文学史的課題であると思うが、これについては他日あらためて考えてみることにしたい。

小稿では、「太平記」における畑時能の人物像を把握する過程で、その最大の特質を伝奇性にみる観点に到達し、それを「太平記」の文学的世界に接近する手がかりとしようと試みたわけである。正成や畑らを、ひとしく伝奇的人物とみなす、そのとらえ方にも問題があらうし、「伝奇的人物」という概念や用語にもあいまいさがあった、熟さないものを感じているが、ひとまず未熟な試論として提出したい。

注(1) 以下とくにことわらないかぎり、章段名・本文は西源院本（刀江書院版）に拠っている。

- (2) 「大日本史料」第六編之六所引による。
- (3) 欠巻の記事内容については、鈴木登英恵氏「太平記欠巻考」図文11号（昭34・7）が精細に推考されている。
- (4) 犬を狩猟に用いた歴史は古く、例えば「万葉集」巻七の二二八九の歌にも「廻越ゆる犬呼びこして鳥狩する君青山のしげき山辺に馬息め君」と歌われている。
- (5) 時能の曖わしい素姓や、前述した彼のゲリラ的、忍者的歌法、さらに例えば甲賀三郎の求術を名のる甲賀望月氏が「重頼応仁記」で「山賊」とされていること（福田晃氏「甲賀三郎の後風」下、国学院雑誌昭37・7・8による）などを思いあわせると、彼が、忍者・倫盛・非人の類と密接なつながりのあったこともじゅうぶん考えられよう。
- (6) 林屋辰三郎氏「南北朝」（昭32、創元社）P.57
- (7) 黒田俊雄氏「太平記の人間形象」文学 昭29・11
- (8) ここに引いた畑についての批評は、流布本では、

「凡此烟ハ悪逆無道ニシテ、罪障ヲ不忌ノミナラズ、無用ナルニ僧法師ヲ殺シ、仏蘭社壇ヲ焼燬チ、修善ノ心許リモナク、作『悪業』事如シ山重シカバ、勇士智謀ノ其苦有シカ共、遂ニ天ノ為ニヤ被シ罰ケン、流矢ニ被レ假テ死ニケルコソ無愆ナレ」(慶長八年古活字本)古典大系本に拠る。天正本・京大本・梵拜本などをよくめた後出諸本は、これとほぼ同文)

となっており、烟の「智力智謀」への称頌は後退し、仏教的・因果論的立場からの批判が強まっている。この因果論の増補が後出諸本の一般的傾向であることは、釜田吾三郎氏「民族文芸としての太平記の成長―因果論を中心として―」國語と國文学第18・3に御指摘がある。

なお、この「烟六郎左衛門時能事」の章全体の本文についても、西源院本・玄以本などの古態本系統と天正本・梵拜本などをよくめた後出本系統の二系統に大別できるようである。

(9) 「太平記」の篠塚記事は彼の「隠岐島」落ちて終っているが、その後の篠塚についても、種々の伝承があったようである。例えば、松浦静山の「甲子夜話」(一八二二)巻七十には、篠塚が西国の軍破れた後、流浪して浅草に來り、角田川のはとりの稲荷の小社に主家再興を祈願したがかなわず、入道してその祠の傍に住んだため、世人これを篠塚稲荷と呼んだという話がみえている。

(10) 「太平記」における新田氏の描き方については、鈴木登英恵氏「太平記に於ける新田氏」国文9号(昭33・5)に詳論されている。

(11) 南朝或いは楠木正成と敵所民・悪党などとの結びつきについては、注6にあげた林尾氏著書や最近のものでは佐藤和彦氏「南北朝の内乱」(小学館版日本の歴史11巻、昭49) P.94-101など、大塔宮・正成・児島高德などと修験・山伏とのつながりについては、和歌森太郎氏「登

驗道史研究」(昭17、河出書房)、村山修一氏「山伏の歴史」(昭45、塙書房)などで、それぞれ論ぜられている。

(12) 鈴木登英恵氏「欠巻前後に於ける太平記の書き継ぎ」国文8号(昭32・12)

(13) 板井好朗氏「英雄とその怨霊―『太平記』」(『神々の変遷』第四章第二節、昭51)

(14) 換言すれば、いわゆる後期軍記は、『太平記』第一部・第二部にみたような伝奇的なロマンの世界を、ほとんど継承することなく、リアルだが平板な記録を、おびただしく生産したといえる。伝奇的世界は、軍記よりも、例えば鶴経源・百合若翠・甲賀三郎源などのように、民間伝承や民衆的な物語・語り物に多く見出されるのが、中世後期、すなわち室町・戦国期文芸の一特徴といえようか。